

スイスの学校音楽教育 —聴取と評論能力育成に着目して—

今 由佳里*

(2012年10月23日 受理)

Music Education in Switzerland A point of view of children's audition and criticism ability

KON Yukari

要約

言葉だけでは表現しつくせないものを表現できるものが音楽である、という概念は多くの人が有していることであろう。平成20年3月に告示された新学習指導要領では、言語活動の充実が掲げられ、音楽科においてもその実施が推進されている。しかしながら、言葉を伴わない音の芸術である音楽をいかに言語活動と結び付けて学習をすすめるかについては、多くの議論がかわされている状態である。欧米の学習方法に目をむけると、聴取した音楽作品に対して、批評を行う活動を取り入れることによって言語活動を推進していることに気づかされる。音楽作品に対する自らの意見を言葉として表現することによって、子どもたちは自分自身の意見に客観性を持たせ、音楽に対する洞察力を深めているのである。また、このような学習を積み重ねていくことによって、自らの音楽アイデンティティを育み、生涯にわたって音楽を親しむ基礎をつくりあげているのではなかろうか。本稿では、スイスの音楽学習のあり方から音楽科における言語活動の取り組みについて検討し、日本の学校音楽教育導入への可能性を探っている。

キーワード：スイス、ジュネーヴ州、学校音楽教育、評論能力、聴取

はじめに

平成20年3月に告示された新学習指導要領では、言語活動の充実に関する内容が提示された。

芸術教育とは、子どもたちに質的な判断能力を養うことに大きな意義を有している。それは他教科とは違い、言葉や数値で答えが導き出されるような性質の学習とは異なっているからであ

* 鹿児島大学教育学部 准教授

る。それでは、音楽科における言語活動ではどのような取り組みを行うべきであろうか。

言語活動に関するこの告示が出た際、音楽教育者から子どもたちが音楽から感じとったことを言葉で十分表現しきれないのではないかと危惧を感じるという意見がだされた。また、音楽とは言語を伴わない音の芸術であるから言葉を用いる必要はないという意見も認められた。さらには、国語力の伸長に寄与するだけではなかろうかという考えも見られ、音楽科における実施にはいくつかの課題が提示されているという状態であろう。とはいえ、これまで受身になりがちであった鑑賞活動が、言語活動を取り入れることによって能動的な活動に転換されるという期待も見られ、今後その展開の方法が注目されている。

本稿では、幼少時から自己の意見を積極的に表明する教育がなされている欧米型の教育方法から、音楽科における言語活動のあり方を検討していきたい。対象はスイス・フランス語圏の州都であるジュネーヴ州を取り上げ、『習得目標（拙訳）』から聴取と評論の能力育成についてその教育内容を検討し、日本の学校音楽教育導入への示唆を得る。

1. 日本における言語活動の内容

表1は、義務教育期間の小・中学校9年間の音楽科における言語活動に関する記述である。

表1：言語活動に関する記述

	学 年	領 域	内 容
小 学 校	1, 2年	B鑑賞(1) ウ	楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲や演奏の楽しさに気付くこと。
	3, 4年	B鑑賞(1) ウ	楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲や演奏のよさに気付くこと。
	5, 6年	B鑑賞(1) ウ	楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲や演奏の楽しさに気付くこと。
中 学 校	第1学年	B鑑賞(1) ア	音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き、言葉で説明するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。
	第2, 3学年	B鑑賞(1) ア	音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠を持って批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。

この表から、日本の学校音楽教育の中では義務教育期間中に、音楽に対する感覚的聴取と分析的聴取の両面からアプローチし、それを言葉で表す能力が獲得されるよう計画されていることがわかる。これまで音楽科の授業では、作品を鑑賞し、その楽曲から受けた印象を感想として記述するという感覚的聴取が中心の学習であった。今回の告示では、音楽を形づくっている要素や構造を曲想とのかかわりから聴取するという分析的聴取の内容に、より重きを置くようになったの

ではなからうか。さらに、分析的聴取によって聞き取った内容を根拠として、作品に対して音楽批評する活動が取り上げられている点も注目される。しかしながら、このような学習内容をいかにして学校音楽教育の中で取り組むかについては、模索している段階であろう。

音楽科に求められている言語活動では、①音楽と言葉との関係、②自分のイメージや思いを伝え合い共有するコミュニケーション力、③根拠を持って自分なりに評論する活動という3つの内容が主軸となる。

一点目の音楽と言葉との関係については、歌の活動が挙げられるだろう。歌唱や合唱の活動においては、言葉は音楽に切り離せない重要な要素である。歌詞の意味から子どもたちは音楽へのイメージを膨らませ、音楽表現の工夫を考えていく。また二点目の自分のイメージや思いを伝え合い共有するコミュニケーション力については、音楽をきいて感じ取った思いを表明する活動である。子どもたちの中には音楽のよさをうまく感じ取れる子どもと苦手な子どもが存在する。しかしながら、音楽のよさを言語で表現することによって、クラス全員でその良さを共有できるという利点や、他者の考えを聞くことによって自己の考えを深めたり広げたりすることができるという効果があり、言語でのコミュニケーションの重要性について表している。これら二点に関しては、従来の音楽教育の中でも取り上げられてきた内容である。

三点目の根拠を持って自分なりに評論する活動は、音楽的な要素を理解し思考する活動となり、今回の言語活動の充実に対応する内容である。これまでの音楽科では、この点について重要であることは認識しつつも、特記されることは少なかったのではなからうか。

2. ジュネーヴ州の小学校における『習得目標』

本項では、ジュネーヴ州の公教育課から提示された『習得目標』の聴取と言語活動に関する内容を取り上げ、検討する。この『習得目標』とは、日本の学習指導要領に対応するもので、音楽教育の目的、内容、評価の方法が記されている。内容構成は以下の通りである。

習得目標（音楽科）

1. 認識的な解明
2. 実施すべき教育的アプローチ
3. 目標の設定と構成
4. 教育課程終了時に期待するもの
5. 初等教育課程終了時に期待するもの
6. 中等教育課程終了時に期待するもの
7. 教育計画

2.1 「目標の設定と構成」の内容

図1は、音楽科における「目標の設定と構成」である。この「目標の設定と構成」では、「核となる目的」が「聴く」と「音楽によって自己表現する」とに分けられ併記されている。

これらを実現するための構成要素として「聴く」では、「五感による認識」「様々な音楽文化の基礎を学ぶ」活動が挙げられている。また「音楽によって自己表現する」においては、「再現する、創作する、解釈する」という活動が挙げられている。ところ

で「聴く」は、単に音楽を鑑賞することだけを意味するものではない。聴く活動は、図1に示したように、7つの特定の目標「記憶する (Mémoriser)」「評価する (Apprécier)」「名付ける (Nommer)」「識別する (Reconnaître)」「比較する (Comparer)」「分析する (Analyser)」「書き写す (Transcrire)」から成り立っている。

同様に「音楽によって自己表現をする」を見ると、6つの特定の目標「意識する (Prendre conscience)」「探索する (Explorer)」「リズムをつける (Rythmer)」「歌う (Chanter)」「身体を動かす (Bouger)」「即興する (Improviser inventer)」から成り立っている。歌を歌ったり、楽器を演奏したりするだけでなく、身体の動きを用いることによって表現力を増大させているのである。また、多角的な方向からアプローチし表現を探索することによって、表現の幅を広げている。「探索する」活動を取り入れることによって、自分が表現したいイメージを明確に子どもたちに掴ませられる時間を持つことができるのである。

『習得目標』では、小学校で音楽教育を行うことは「過去や現在、地域やジャンルを越えた様々な音楽を比較しつつ、一つの文化及び異なる文化の扉を子どもたちの前へ開ける。これら異なった文化での表現の豊かさと相補性を子どもたちに気づかせる。この供給の多様性は、尊敬と寛容さを学ばせ、個人の嗜好と音楽を聞いて自分の意見を述べられる評論の精神を形成する」と定義され、音楽活動の中でも自らの意見を言葉として表現することの重要性が明示されている。表2には、各領域独自の内容を整理して示す。

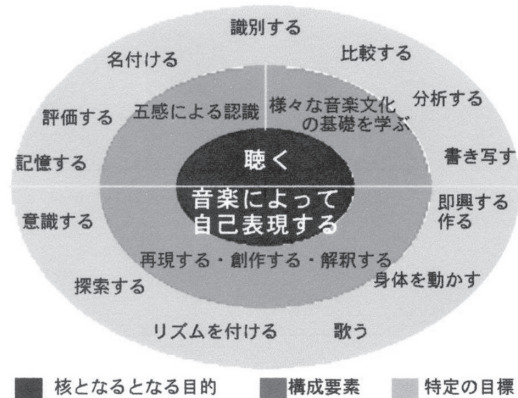


図1: 目標の設定と構成

表 2：各学習領域の「特定の目標」と構成内容

活 動	構 成 内 容	
五感による認識と様々な音楽文化の基礎を学ぶ		
聴く	記憶する	模唱，模奏，暗譜
	識別する	物音，楽音，音色，楽器，音の動き，音程，メロディー，主題，リズム
	比較する	音色，高さ，速さ，音のニュアンス，音楽的ジャンル，異なった時代，発祥地
	名付ける	音色（物音，楽器），音の高さ（高い，低い），速さ，音のニュアンス（ピアノ，フォルテ）
	評価する	異なった作品を聞きわける
	分析する	器楽編成，上記の評価基準をもとに音楽的に異なった形式（例：A-B-A）
	書き写す	理解した音楽要素を図表にあらわしたり，あるいは身体によって表現する（例：音の動き，或は形式）
再現する，創作する，解釈する		
音楽によって自己表現する	探索する	空間，音，自分自身の声と身体の可能性
	歌う	一人，あるいは集団で旋律を歌う。 単声あるいは多声の歌。 声を使いこなす（明確さ，正確さ，質）
	リズムをつける	リズムミカルな表現。 リズムやテンポ，テンポの分割，最初のテンポ，オスティナートを奏する。 楽器を使いこなす（簡単なパーカッションの楽器）。
	身体を動かす	音楽にあわせて身体表現をする。 基本の動きを使いこなす（歩く，走る，駆け足，飛跳ねる，ジャンプ，身体を揺らす）。
	即興する・作る	リズムやメロディーやムーブメントや音の出る環境から，声や身体，楽器を用いて作り出す。
	意識する	音楽構造

2.2 聴取と言語活動に関する実践例

『習得目標』では，中等教育課程の最初の活動として「比較聴取」を提唱している。比較聴取については、「異なった音楽作品を，比較して注意深く聴くことによって批評できるように促す」と記されている。なおここには，子どもたちが注意深く聴取し，楽曲を自分の言葉で批評する活動が行えるように以下の状況を教師へ提案するよう指示が付記されている。

君は，ラジオのディスクジョッキーです。君は今，3つのレコードを受け取りました。
これから君はそのディスクに興味を持ったことについて，口頭で聴衆に紹介しなければなりません。

ここでは，子どもたちがラジオのディスクジョッキーになった設定で，選曲された3曲について自分の意見を聴衆に紹介するロールプレイングの活動を行うことを求めている。

紹介する楽曲は、南アメリカの伝統的音楽《コンドルは飛んでいる》、ヴィヴァルディーの《C調マンドリンのためのコンチェルト・アレグロ》、マナウというグループによって歌われているブルターニュ・ラップ《ダナの部族》である。3曲の楽曲の特徴は以下のとおりである。

表3：3曲の特徴

南アメリカの伝統的音楽《コンドルは飛んでいく》	ヴィヴァルディーの《C調マンドリンのためのコンチェルト・アレグロ》	《ダナの部族》(マナウのブルターニュラップ)
<ul style="list-style-type: none"> ・南アメリカの伝統的民俗音楽(ペルー)。 ・特徴的な楽器の使用：先住民のアルパ、フルート(ケーナ)、太鼓。 ・メロディーをまずはアルパで、次はケーナで演奏する。 ・曲の途中におけるリズムの変化。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クラシック音楽(ヴィヴァルディー)。 ・管弦楽に支えられたマンドリンが独奏楽器として使われている。 ・マンドリンとリフレインとして何度もあらわれるオーケストラとの間の対話をきく。 ・全体的に陽気で、リズムカルである。 ・オーケストラのリズムは、何度も繰り返されている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・現代の音楽：ラップ。 ・伝統的な音楽を現代的にアレンジしたもの。 ・楽器(バグパイプ)のパートと歌声によって始まり、次にリズムによってラップされていることばを聞く。 ・話されることばとリズムの重要性。 ・旋律楽器を伴ったリズム伴奏。 ・何人もの声によって、歌われるリフレイン。

この活動の目的は、子どもたちが音楽の意識的聴取を学ぶことにある。これらの作品を選択した理由として民俗音楽、クラシック音楽、現代のポップスというタイプの異なる楽曲のため比較しやすいということが挙げられるだろう。子どもたちにとっては、類似したジャンルの楽曲よりも比較が容易になり、自分自身の意見について言語表現を促されることになる。教師がこの活動を行うにあたって、『習得目標』では以下の方法が示されている。

- * 初聴取の後、他のジャンルの音楽と比較して、聞いている音楽のジャンルを位置づけられるような特徴を子どもたちが明確に発言できるかどうかについてたずねる(雰囲気、音色、リズム)。
- * 最初に目立つ特徴を集めた後、それぞれの曲で聴き取れた楽器のリストを作るよう提案する。そして、それらの楽器を楽器属によって分類するよう提案する(弦楽器、管楽器、打楽器、電子楽器、声)。それぞれの曲の中に似通った楽器はあるかどうかを聴き分ける。
- * 答えをより明確にするため、それぞれの音楽を何度も聴きなおす。
- * ひとつ、あるいはいくつかの曲の中で、独特なリズムを選択したり、再生したりする。そのために、同じパッセージを何回か聴きなおす。
- * リフレインのメロディーを繰り返す：歌ってみる。記憶できるようにするため、同じ部分を何度か聴く。
- * この音楽全体を再度聴取し、子どもたちがそれぞれの楽曲に対して自分の意見を言えるよう

にする。好きな作品順に番号をつけたり、その理由について自らの意見を述べられるようにする（どうして好きか、あるいはあまり好きではないか、まったく好きではないかということをお口頭で説明することができるようにする）。

この活動は、ジュネーヴ州の「核となる目的」の中で「聴く」「音楽によって自己表現する」の2領域にまたがっている。作品の比較聴取を行うことによって、子どもたちは自分の音楽の好みを意識し、それぞれの嗜好形成が育まれていく。様々なタイプの楽曲について、それぞれが自分の意見を述べられるようにする評論の精神の育成が目的とされているのである。なお以下表4は、この活動に関する評価の観点である。

表4 評価のガイド

核となる目標	構成要素	評価の判断基準 (特定の目標)	評価の目安
聴取 音楽による表現	五感による認識	異なった楽器、及び、それらの楽器属の中における位置づけを識別し、名称をつける。	少なくとも3つの楽器が、子どもたちによって識別され、楽器属の中に位置づけられる。
	様々な音楽文化の基礎を学ぶ 再現する 創作する 解釈する	音楽的に異なったジャンルを比較し、分析する。	1曲の抜粋部分の中で、少なくとも2つの固有な特徴を明確にできる。
		議論しつつ、異なった音楽的ジャンルを評価する。	選択された曲に関する論証が示せる。
		一人やグループで、聞き取った特徴的なリズムを叩いてリズムをとる。	1曲の中で、聞き取ったリズムが、正確に再現できる。
		1人やグループで、聞き取ったメロディーのモチーフを歌う。	1曲の中で、聞いた旋律のモチーフを正確に再現できる。

3. 聴取能力の育成

前述している図1から、「聴く」は、「記憶する」「評価する」「名付ける」「識別する」「比較する」「分析する」「書き写す」という7つの「特定の目標」から成り立っていることがわかる。これらは、音楽理解を深めるための聴取であり、音楽の構造を分析的に聴き取る分析的聴取と音・音楽そのものの美しさを聴き取る感覚的聴取にバランスよく分けられ構成されている。また、アプローチの方法も多様で、聴取したものを声や楽器で模倣したり、音や身体、図形にして再現したりする活動が記述されている。また、メロディーを記憶し、再生する音楽的記憶力の育成も見られる。

4. 評論能力の育成

『習得目標』の中では、子どもたちに音楽の嗜好を明確に言語によって表明させる活動が多く見られる。「音楽科目の貢献」として、「個人の嗜好を形成することで、意識して自己を主張したり、工夫して表現することができるようになる。そして自立性や共同制作の感覚、寛容さと創造の精神、価値観を発達させつつアイデンティティーを鍛えられる」と記されている。具体的には

上述した「中等教育課程」で提示されている比較聴取の活動が例として挙げられるだろう。ここでは、全くタイプの異なった3つの楽曲を聴取し、それぞれの曲に対して自らの意見を述べる。次に、自分の好みの順に番号をつけ、その選択の理由を口頭で説明する活動が行われているのである。

個々人の音楽的価値観を育成することによって、それぞれが嗜好する音楽に沿って、個性的な音楽表現を発見、創造する意欲が生まれるきっかけとなる。個性とは、自らの好き嫌いをはっきりと表明する中で子どもたちの中に徐々に培われていくものであろう。ジュネーヴ州では、意識して自己を主張することによって、子どもたちの嗜好形成を促し、音楽的アイデンティティーを育むよう計画されている。各自が音楽的嗜好を形成、認識することで、自己を主張することが容易となってくる。そしてこのことが子どもたちの言語活動を促し、評論の精神を育成することに繋がっているのではなかろうか。

おわりに

音楽作品に対する自らの意見を明確に表明する評論の精神の育成がジュネーヴ州の『習得目標』の中には数多く見られた。またこの学習は、聴取の活動と連携して行われていることもわかった。聴取した音を模倣することから始まり、音楽を比較したり、評価したりする学習によって、子どもたちは次第に自らの音楽的嗜好を確立していく。多種多様な音楽に触れることにより、自己の音楽的嗜好を確かめるきっかけもつくられている。さらには、自らの音楽的嗜好を言語で表現することによって、自分の感じたこと、表現したいことを整理し定着化させている。ジュネーヴ州では、自己の音楽アイデンティティーを有することによって、子どもたちの言語活動を促進し、音楽表現力の拡大に繋がっているのではなかろうか。

本研究は、平成23～24年度科学研究費補助金 若手研究 (B) 課題番号 23730839 (研究代表者：今 由佳里) の助成を受けて行なっている研究成果の一部である。

【参考文献】

- ・今 由佳里「スイス・ジュネーヴ州における複合的アプローチによる音楽教育」『音楽教育実践ジャーナル』, Vol.8, No.2, pp.70-73, 2011
- ・Département de l'instruction publique, *Les objectifs d'apprentissage de l'école primaire genevoise*, Genève, 2000
- ・Département Formation et Jeunesse du Canton de Vaud, *LA MUSIQUE A L'ECOLE: Guide méthodologique à l'usage des enseignants des classes enfantines et primaires*, Loisirs et Pédagogie, 1987
- ・Département Formation et Jeunesse du Canton de Vaud, *VIVA VOCE : Guide Méthodologique à l'usage des enseignants des 5e et 6e degrés*, Loisirs et Pédagogie, 1988
- ・Office du matériel scolaire, *A vous la musique*, Office romand des éditions et du matériel scolaires, 1982-1989
- ・Isabelle Mili, *La vie musicale en Suisse*, Pro Helvetia, 2001